

## メディア記載情報 2022年度まとめ

- ・2023年3月19日/東京新聞『フロンティア発 カモシカの社会進化、捉えた 餌が豊富な草原で「多妻」』/山地に住む国の特別天然記念物「ニホンカモシカ」は、森林に生息するときには一夫一妻制の関係なのに対して、草原では一夫多妻の関係になることが分かったとの研究結果を、東京農工大などのグループが動物行動学の国際誌に発表したと紹介される。
- ・2023年3月13日/ナゾロジー『カモシカは森林から草原に移ると開放感で「プレイボーイ」になる?!』/東京農工大学（農学部附属野生動物管理教育研究センターの高田隼人特任准教授など）の研究チームは、7年にわたるニホンカモシカの長期観察から、森林に暮らすカモシカと草原に暮らすカモシカでは“恋愛事情”が変わることを発見したと紹介される。
- ・2023年3月9日/新潟日報『キラリ推し面 [狩猟の現場・識者インタビュー] 薄れる野生動物との境界線、人と獣 どう共存？/人と獣が共存していくには、どうすればよいのかについて、東京農工大名誉教授 梶光一氏のインタビューが掲載される。
- ・2023年3月3日/朝日学生新聞デジタルプラス『増えすぎたシカ どう向き合う』/長年、シカを研究している東京農工大学の宇野裕之特任教授の解説とコメントが掲載される。
- ・2023年2月23日/朝日小学生新聞『野生動物と共に増えすぎたシカ どう向き合う』/長年、シカを研究している東京農工大学の宇野裕之特任教授の解説とコメントが掲載される。
- ・2023年2月19日/読売新聞『サイエンス Report トキ本土野生化へ環境整備…日本産絶滅20年 共存に課題も』/東京農工大の小池伸介教授は「木登りが得意な外来種アライグマも、木の上に営巣するトキの脅威になり得る」と指摘すると紹介される。
- ・2023年2月16日/朝日小学生新聞『野生動物と共に人里にクマ 対策さぐる』/ツキノワグマの首につけたカメラで撮影した動画から暮らしの様子を調べる東京農工大学大学院の研究が紹介される。
- ・2023年2月14日/朝日新聞『タヌキは人間を見ている？コロナ禍で大胆に 東京農工大が行動調査』/都市に生息するタヌキも、人間が外にいないコロナ禍では行動が大胆になる――。東京農工大学（東京都府中市）の研究チームがそんな調査結果を発表したと紹介される。
- ・2023年2月8日/京都新聞『コロナでタヌキの採食変化』/新型コロナウイルスにより人間の活動が低下した影響で、都市に生息するタヌキの採食行動が夜間中心から日中に変わったと東京農工大などの研究チームが発表したと紹介される。
- ・2023年2月7日/東奥日報『コロナでタヌキの採食変化』/新型コロナウイルスにより人間の活動が低下した影響で、都市に生息するタヌキの採食行動が夜間中心から日中に変わったと東京農工大などの研究チームが発表したと紹介される。
- ・2023年2月5日/中国新聞『コロナでタヌキの採食変化』/新型コロナウイルスにより人間の活動が低下した影響で、都市に生息するタヌキの採食行動が夜間中心から日中に変わったと東京農工大などの研究チームが発表したと紹介される。
- ・2023年2月2日/朝日新聞デジタル『都市のタヌキ、コロナ禍で堂々と食事 研究者「したたかに人見てる」』/都市に生息するタヌキも、人間が外にいないコロナ禍では行動が大胆になる――。東京農工大学（東京都府中市）の研究チームがそんな調査結果を公表したと紹介される。

- ・2023年1月28日/中部経済新聞『SCIENCE TOPICS コロナでタヌキの採食変化』/新型コロナウイルスにより人間の活動が低下した影響で、都市に生息するタヌキの採食行動が夜間中心から日中が変わったと東京農工大などの研究チームが発表したと紹介される。
- ・2023年1月22日/東京新聞『科学シルマナブ クマの食事風景とらえた！首にビデオ、生態ありあり』/東京農工大などのグループが、クマが何をどんなふうに食べているのか、鮮やかな動画で記録することに成功し、米科学雑誌に発表したと紹介されるとともに、森林生物保全学研究室提供の写真が掲載される。
- ・2023年1月15日/大学ジャーナル『東京農工大学など、野生クマの食生活をクマ目線で撮影することに成功』/東京農工大学、アメリカ・イリノイ大学、東京農業大学などの研究者からなる国際共同研究チームが、ビデオカメラを搭載した首輪を野生のツキノワグマに装着することで、クマ目線での採食行動を記録することに世界で初めて成功したと紹介される。
- ・2023年1月11日/iZa『タヌキ、人間を恐れず「お昼ごはん」？ 外出自粛で野生動物の採食行動に変化か』/新型コロナウイルス禍が本格化した2020年には、野生のタヌキとニホンアナグマの採食行動（餌を探し食べる行動）が変化したとする論文を東京農工大学と米イリノイ大学の共同研究チームが発表していると紹介される。
- ・2023年1月9日/ナゾロジー『子供も殺して食べる!? 厳しいクマの生活を首輪カメラで撮影!』/東京農工大学大学院グローバルイノベーション研究院に所属する小池伸介教授ら研究チームは、首輪に内蔵したカメラを用いて、野生のツキノワグマの生活を撮影することに成功したと紹介される。
- ・2023年1月6日/ニュースイッチ『新型コロナ流行とたぬきの食生活の関係、東京農工大が明らかにしたこと』/東京農工大学の小池伸介教授らは、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う人間活動の低下がタヌキやアナグマの食生活に影響を与えることを明らかにしたと紹介される。
- ・2023年1月5日/日刊工業新聞『コロナ流行で人間活動低下 タヌキなどの食生活影響』/東京農工大学の小池伸介教授らは、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う人間活動の低下がタヌキやアナグマの食生活に影響を与えることを明らかにしたと紹介される。
- ・2022年12月29日/北海道新聞『獣害防止へ専門家育成 酪農大など全国6大学連携、教育課程試行履修生、自治体に配置』/試験開講した「野生動物管理コアカリキュラム」に酪農学園大のほか、東京農工大、兵庫県立大、山形大、岐阜大、宇都宮大が参加すると紹介される。
- ・2022年12月26日/日本経済新聞『東京農工大、カメラ首輪を使いクマ目線での野生のツキノワグマの採食行動を撮影することに成功』/東京農工大学大学院グローバルイノベーション研究院の小池伸介教授、学部生 手塚詩織、長沼知子特任助教、イリノイ大学（兼任東京農工大学大学院グローバルイノベーション研究院・特任准教授）の Maximilian L.Allen 准教授らの国際共同研究チームは、ビデオカメラを搭載した首輪を、野生のツキノワグマに装着して、クマの採食行動を記録することに世界で初めて成功したと紹介される。
- ・2022年12月12日/深デジ『兵庫県森林動物研究センター開設15年 専門家3氏に聞く 河合先生がセンター設立に込めた思いとは?』/東京農工大名誉教授の梶光一所長（69）のセンター設立に込めた思いが紹介される。
- ・2022年12月10日/丹波新聞『獣害の「リアル」知る 被害地域の“せめぎ合い”学ぶ 6大学連携する全国初の試み』/兵庫・丹波市/東京農工大2年生の中山朝葉さん（20）は、「授業で学んではいたが、現場

に足を運ぶと、イメージと大きく違い、想像以上に防除や管理に人手、時間、お金が掛かることが分かった。農家の方々の農地を守りたいという強い熱意も感じた」と話したと紹介される。

・2022年10月14日/大学ジャーナル『日本の森林生態系では動物死体の除去に哺乳類が活躍 東京農工大学』/東京農工大学と米国イリノイ大学の国際共同研究チームは、日本の森林内にシカ死体を設置し、死体を発見する動物、死体の発見時間と消失時間、またそれらに影響を及ぼす要因について検証したと紹介される。

・2022年10月11日/文教.com『【農工大】森の中のシカ死体、だれが最初に見つけて食べている？～動物によるシカ死体の発見と消失のパターンを解明～』/森林内におけるニホンジカ死体を漁る死肉食動物（スカベンジャー）によるシカ死体の設置から死体を発見するまでの時間と死体の消失時間を定量化し、それらに影響を及ぼす要因を検証したと紹介される。

・2022年10月11日/ナゾロジー『森で死んだものはどうなるのか？ シカの死体を使った実験』/東京農工大学大学院、米イリノイ大学（University of Illinois）の共同研究チームは、森林内にニホンジカの死体を設置し、どのスカベンジャー（死肉食動物）が、どれくらいの時間で発見できるか、また、死体が消失するまでにどの程度かかるかを調査したと紹介される。

・2022年10月1日/2030SDGsで変える 2022年版『スキー場閉鎖でチョウ消える』/スキー場が閉鎖されると周辺のチョウも減っていく――。東京農工大学（東京都府中市）の研究チームがそんな調査結果を発表したと紹介される。

・2022年8月18日/NHK『WEB特集 “チョウの楽園”を私たちがつくっていた!？』/生態学が専門で、子どもの頃からチョウが大好きだという東京農工大学の小池伸介教授のインタビューが掲載される。

・2022年8月14日/読売新聞『クマ捕獲10年で最多 生息数推定1300頭 20年で3倍近く』/人とクマとの共存を目指す連絡組織「日本クマネットワーク」副代表の小池伸介・東京農工大学大学院教授（生態学）の話「保護から管理への転換は全国的な流れだ。クマは山奥にいるという意識を変え、身近なイノシシやサルの鳥獣対策と同様に、人里に近づけないよう地域ぐるみで『すみ分け』を進めていくことが大事だ」が紹介される。

・2022年8月14日/読売新聞『「ガサガサ」と物音、黒い塊が体当たり…クマ急増で生息域の拡大防止へ方向転換/人とクマとの共存を目指す連絡組織「日本クマネットワーク」副代表の小池伸介・東京農工大学大学院教授（生態学）の話「保護から管理への転換は全国的な流れだ。クマは山奥にいるという意識を変え、身近なイノシシやサルの鳥獣対策と同様に、人里に近づけないよう地域ぐるみで『すみ分け』を進めていくことが大事だ」が紹介される。

・2022年8月14日/yahoo!ニュース『「ガサガサ」と物音、黒い塊が体当たり…クマ急増で生息域の拡大防止へ方向転換/人とクマとの共存を目指す連絡組織「日本クマネットワーク」副代表の小池伸介・東京農工大学大学院教授（生態学）の話「保護から管理への転換は全国的な流れだ。クマは山奥にいるという意識を変え、身近なイノシシやサルの鳥獣対策と同様に、人里に近づけないよう地域ぐるみで『すみ分け』を進めていくことが大事だ」が紹介される。

・2022年8月14日/So-net ニュース『「ガサガサ」と物音、黒い塊が体当たり…クマ急増で生息域の拡大防止へ方向転換/人とクマとの共存を目指す連絡組織「日本クマネットワーク」副代表の小池伸介・東京農工大学大学院教授（生態学）の話「保護から管理への転換は全国的な流れだ。クマは山奥にいるという意識を変え、身近なイノシシやサルの鳥獣対策と同様に、人里に近づけないよう地域ぐるみで『すみ分

け』を進めていくことが大事だ」が紹介される。

・2022年8月9日/毎日新聞『大和森林物語／104 奈良の草原を探して／1 夏のスキー場は虫の楽園／奈良/東京農工大学のチームが、スキー場に生息するチョウの研究を発表していたと紹介される。

・2022年7月23日/福山大学『「新しい教科書『哺乳類学』の刊行」のプレリリースについて/新しい教科書『哺乳類学』において、序章、第三部、終章、あとがきを小池伸介教授が担当していることが紹介される。

・2022年7月20日/AERAdot.『都会にすむタヌキやアナグマは「早食い」だった！ 最新研究でわかった知られざる生態とは？』/東京農工大学大学院特別研究生の大杉滋さんと小池伸介教授らの国際共同研究チームは、「山間部の森林」と、住宅街に接した「都市の森林」にすむタヌキとアナグマの食事のしかたを調査して、興味深い事実を明らかにしたと紹介される。

・2022年6月17日/朝日新聞『スキー場閉鎖ならチョウが消える 東京農工大、生態系の影響調査』/スキー場が閉鎖されると周辺のチョウも減っていく――。東京農工大学（東京都府中市）の研究チームがそんな調査結果を発表したと紹介される。

・2022年6月16日/マイナビニュース『雑食動物であるクマの食事とシカの生息数の関係に迫る』/東京農工大学大学院グローバルイノベーション研究院、森林研究・整備機構 森林総研（森林総研）、サウスイーストノルウェー大学、東京農業大学地域環境科学部らの国際共同研究チームは、ニホンジカの増減でツキノワグマの食生活がどう変わるかについて調査したと紹介される。

・2022年6月15日/月刊 ジュニアエラ『「都市」に進出したタヌキやアナグマは「山間部」と生活スタイルを変えていた！ 食事は、「夜に素早くこっそり」が都会流！』/東京農工大学大学院特別研究生の大杉滋さんと小池伸介教授らの国際共同研究チームは「山間部の森林」と、住宅街に接した「都市の森林」に住むタヌキとアナグマの食事のしかたを調査したことが紹介される。

・2022年6月10日/日経産業新聞『スキー場閉鎖でチョウ減少』/東京農工大学などの国際研究チームは、スキー場が閉鎖してゲレンデの管理が長期間なされないまましていると、生息するチョウの種類や個体数が減少してしまうことを突き止めたと紹介される。

・2022年6月3日/朝日新聞デジタル『チョウが消える…相次ぐスキー場閉鎖で起きる生態系の変化と歯止め策』/スキー場が閉鎖されると周辺のチョウも減っていく――。東京農工大学（東京都府中市）の研究チームがそんな調査結果を発表したと紹介される。

・2022年5月18日/読売新聞オンライン『仙台の山林 クマ目撃相次ぐ』/小池伸介・東京農工大学大学院教授の「全国的にもクマの生息地が市街地近くの山林へ拡大している。目撃情報がある場合、周辺住民はクマの行動が活発になる朝夕に1人での行動を避けるなど注意が必要。クマと遭遇する場所をなくすために河川の草を刈るのは効果的」とのコメントが紹介される。

・2022年5月18日/読売新聞オンライン『クマに出会ったら「背中を見せずに離れて」…仙台の山林で相次ぐ目撃、看板で注意』/小池伸介・東京農工大学大学院教授の「全国的にもクマの生息地が市街地近くの山林へ拡大している。目撃情報がある場合、周辺住民はクマの行動が活発になる朝夕に1人での行動を避けるなど注意が必要。クマと遭遇する場所をなくすために河川の草を刈るのは効果的」とのコメントが紹介される。

・2022年5月18日/日本経済新聞『スキー場、長期閉鎖でチョウ減少 東京農工大など発見』/東京農工大学などの国際研究チームは、スキー場が閉鎖してゲレンデの管理が長期間なされないでいると、生

息するチョウの種類や個体数が減少してしまうことを突き止めたと紹介される。

・2022年5月16日/文教.com『【農工大】スキー場であり続けることがチョウにとっては大切 ゲレンデの閉鎖はチョウ類相を衰退させることを発見』/東京農工大学大学院農学府農学専攻の沖和人さん（修士）、同大学院グローバルイノベーション研究院の小池伸介教授らの国際研究チームは、営業の停止に伴い、人為的なゲレンデ管理がなされなくなったスキー場跡地では、営業停止からの経過年数に伴い、観察されるチョウの種類や個体数が減少することを明らかにしたと紹介される。

・2022年5月12日/ねとらぼ『スキー場が閉鎖されるとチョウが生きられなくなる 東京農工大などの研究で判明 最近スキー場減っていますよね……。』/スキー場が閉鎖されればされるほど、チョウが生きられなくなる環境になることが、東京農工大学や東京大学などの研究で明らかになったことが紹介される。

・2022年4月14日/読売新聞『ニュースの門 街の中 クマに出会ったら…』/クマと人が住み分けをする『ゾーニング』について東京農工大学小池伸介教授のコメントが紹介される。

・2022年4月14日/読売新聞『日本にもいる「アーバンベア」…市街地周辺に恒常的に生息、突然遭遇したときの対処法とは』/クマと人が住み分けをする『ゾーニング』について東京農工大学小池伸介教授のコメントが紹介される。

・2022年4月7日/yahoo ニュース『こっそりサクッと…都市のタヌキとアナグマ、気遣いの食生活 農工大』/日本の哺乳類学専門誌「ママル・スタディー」電子版に2月15日付で掲載された「タヌキとニホンアナグマが、人目を避けるような時間帯と場所で、短時間に食事を済ませている」という成果について紹介される。

・2022年4月7日/北海道新聞『子グマ2頭残されたまま 札幌市は監視継続 三角山2人けが1週間冬眠穴の調査法検討へ』/昨年度まで道ヒグマ保護管理検討会で座長を務めた東京農工大の梶光一名誉教授のコメントが紹介される。

・2022年4月7日/yahoo ニュース『札幌・三角山、子グマ2頭残されたまま 2人負傷から1週間、札幌市は監視継続』/昨年度まで道ヒグマ保護管理検討会で座長を務めた東京農工大の梶光一名誉教授のコメントが紹介される。